

『尙書』における競合する聲

——「皋陶謨」と「堯典」の分析——

カイ・フォーゲルザング
Kai VOGELSANG

『尙書』は、中國で引き継がれてきた最も權威ある書であるとともに、中國古典のなかで、最も難解なテキストのひとつである¹⁾。それは 2000 年を通じて學者たちが畏敬の念を抱いてきたとともに、困惑させられてきた書でもあった。多くの者は、賞賛し、しかしながら理解できた者はほとんどいない。確かに、「純粹といってもよいほどの難解さ、すばらしいと言わざるをえない不可解さ」²⁾は、經書としての『尙書』の賞賛に貢献してきたこと大であると言ってもよいかも知れない。夙に漢文帝 (180-157BC) の時代において、『史記』は、「天下に尙書に通じたものはいない」³⁾といい、成帝 (33-7BC) の時代、新しいいくつかのテキストが出現したとき、「それを理解するものは學者、朝廷の役人にはおらず、そこで尙書を扱えるものを探した」⁴⁾のであった。劉起釔は、「知的凡庸な」西漢期の注釋家をかく、辛辣に批判する。

—— 漠として、しかも理解困難な「語屈聲牙」なる『尙書』を前にして、しかしながら、學者として厚祿を受け取ってながら、かれらは己の知識を表明するに無知をさらけだし、『尙書』について知ったらしいことを言ってきた。或る者は「望文主義」をおこない、或る者は自分たちの無知を糊塗せんとして、およそかけ離れた餘談を弄してきた⁵⁾。

西漢の後、千年たって、朱子 (1130-1200) は「今文」の章は解讀が難しいとし⁶⁾、さらにその後、八世紀が経って、Karlgren が「『尙書』はその正確な形式と解釋を決定するのは果たして可能か」との疑念を抱き、「この書ははなはだ難しく、かつ廣範圍にわたって實にはっきりしない文獻だ」⁷⁾と認識したのである。王國維 (1877-1927) といった傑出した學者でさえも、『尙書』のテキストの半分も理解できないと告白している。「それらを

理解できないのは、一人わたしだけではない」、彼はこう言い添えている。

漢魏からこの方、すべての大家がそれらを解説せんとして多くの試みをなしてきたが、説明は定説に至ってはいない。つまり先學もそれらを理解できなかったのだと、私は知ったのだ⁸⁾。

王國維は、なぜ『尚書』が難解で明瞭さに缺けるのかに關して、次の三つの理由を擧げている。(1) テキストの間違いと脱文。(2) 古代の中國語と今日の中國語の相違。(3) テキストのなかでの慣用表現(成語)の多さ⁹⁾。拙稿では、その理由にさらに、『尚書』がもつ複合性という今ひとつの觀點を加えたい。古代中國の典籍は實際、「テキストを集積したものであり、それらの部分は、かなりの部分、何十年にわたって、否、時にはもっと長期にわたって形作られてきた」¹⁰⁾ ということは、周知のことであろう。『尚書』も例外ではなく、多くの研究者はそのテキストの構成が不統一であることをこれまで指摘してきたのである。「康誥」の冒頭の章は、「洛誥」¹¹⁾ から置き換えられたと見なされ、「堯典」の一節は「異なった二つの部分から形成され」¹²⁾、「梓材」の最後は、最初の節とはつながらないと思われる。しかし、以上の見解、さらには別の見解が出されているのは確かであるが、『尚書』の構成要素の比較についての系統的研究は、これまでほとんどなされていなかった。それに反して、多くの研究者は、概してまとまった全體の構成を熱心に考察してきたのである。二十八篇から構成されるのか、それとも二十九篇なのか。「泰誓」は、そこの部分に屬すのか、そうでないのか¹³⁾。かりに、『尚書』が「書き加えられたり、採録されたり、もしくは結合されたり」しているならば、かかる現象は、篇全體が挿入されるといった廣範圍なレベルで起こっているかもしれないことを暗に示しているともいえる。そのことからして、それらの篇はとりわけ等閑視される考察対象としてあつかわれること必定である。『尚書』を研究する者は、ある篇についての思想、年代さらには眞偽を検證するとき、その篇が首尾一貫したものであるという先入観をもって對應するのが普通だと言ってよからう¹⁴⁾。

以下において、私は一步立ち戻り、かかる考えが説得力をもつ假説かどうかを改めて問い直したい。拙論では、『尚書』の二篇、「皋陶謨」と「堯典」——それらは『尚書』のなかでも最も重要で最も難解な章である——の構成を分析することにしたい。一つ一つの字句の意味、文章の句讀、二つの章の名稱・表題・概念に關しては、これまで繰り返し議論され、研究の畏敬すべき集成にほとんど付け加えるものはない¹⁵⁾。かかる方面とはべつに、本論では、過去のそして現代の注釋者には等閑視されてきた一面、つまりこれらのテキストの全體的整合性に焦點をあててみたい¹⁶⁾。

これまでの注釋家は、成句と文章の意味を理解しやすく提示し、またより廣範圍なテキストがまとまった一貫性をもつと認めて、『尙書』の各篇は齟齬をきたさないと、なんの疑いもなく強調してきた¹⁷⁾。かかる總合的方法よりも、むしろ本稿では『尙書』の最も重要な二つの篇に見られる不一致、矛盾をとりあげて、分析的な考察に重點をおくことにする。「皋陶謨」を詳細に分析することから始めて、この篇が單純に並列されたのではなく、互いに明確に對立にしていると思われる相い反する部分から構成されていることを明らかにしよう。そしてそこから「堯典」のなかにも現出すると思える同様のパターンを考えていく。そして最後に、『尙書』全體の考察にかかる見方がいかにどの効果を有するのかという課題にとりくむことにする。

I 皋 陶 謨

「皋陶謨」は、「信賴の置ける」今文『尙書』の「堯典」¹⁸⁾に續く第二番目の篇である。「堯典」と同様、この篇については、注目に値する様々な見解に取り圍まれている。確かに、「皋陶謨」は「堯典」と多くの點で對稱をなしているといってもよい。

(1) 冒頭の「曰若稽古」なる句から始まるといった、對稱性。

(2) 二篇に特有な「兪」「都」といった感嘆詞を共有しているということ。

(3) 「堯典」と「皋陶謨」、この二つの篇は、テキストに關する不可思議な經過を有する。つまり二つの區別される部分から成り立っているということであり、「皋陶謨」の場合には、皋陶謨自身（以下 A と略稱）と「益稷」（以下 B と略稱）である。僞古文においては、それらは別の章となっており、「正當」今文『尙書』においては「皋陶謨」の中に統合されているのである。それゆえ、これらは、もとは一つにまとまったものだと考えられてきたが¹⁹⁾、しかしながら、「皋陶謨」を仔細にみてみると、もどかしさを與えるいくつかの斷絶と矛盾が浮かび上がってくる。繼續性のない短い會話が展開され、韻文が韻をふんだ句をともなって變化し、羅列と歌が敍述風文章のかたちで割り込み、新しい話し手、テーマさらには概念が突如あらわれ、複数の節は、全く整合しないと思われるのである。

篇の構成を詳細につかむには、以下のごとくに、まず短い句に分けるのがわかりやすいであろう。

A1 皋陶による以下の徳にかんする言葉と禹による質問

- 曰若稽古，皋陶曰：「允迪厥德，謨明弼諧。」禹曰：「兪！如何？」
- A2 皋陶による自己と自己の族への獻身と禹による同意
皋陶曰：「都！慎厥身修，思永。惇敘九族，庶明勵翼，邇可遠在茲。」禹拜昌言，曰：「兪！」
- A3 皋陶による知人と安民の言葉と禹による回答
皋陶曰：「都！在知人，在安民。」禹曰：「吁！咸若時，惟帝其難之。」
- α 知人，統治，安民についての修辭句
知人則哲，能官人；安民則惠，黎民懷之。能哲而惠，何憂乎驩兜？何遷乎有苗？何畏乎巧言令色孔壬？
- A4 九徳についての皋陶の言葉と禹による質問
皋陶曰：「都！亦行有九徳。亦言其人有徳，乃言曰：載采采。」禹曰：「何？」皋陶曰：
- β 九徳の項目，三字からなる韻律
寬而栗，柔而立，愿而恭，亂而敬，擾而毅，直而溫，簡而廉，剛而塞，彊而義；彰厥有常，吉哉！
- A4 (續) 徳と官に關する修辭句
日宣三徳，夙夜浚明，有家。日嚴祗敬六徳，亮采有邦。翕受敷施，九徳咸事，俊乂在官，百僚師師，百工惟時；撫于五辰，庶績其凝。
- A5 安逸に對する教化と教育
無教逸欲有邦，兢兢業業，一日二日萬幾。無曠庶官，天工，人其代之。
- γ 天の威力に關する修辭句，「五」による宇宙論，天人相關
天敘有典，勅我五典五惇哉！天秩有禮，自我五禮有庸哉！同寅協恭和衷哉！天命有徳，五服五章哉！天討有罪，五刑五用哉！政事懋哉！懋哉！天聰明，自我民聰明；天明畏，自我民明威。達于上下，敬哉有土！
- A6 皋陶と禹の締めの會話。
皋陶曰：「朕言惠，可底行。」禹曰：「兪！乃言底可績。」皋陶曰：「豫未有知思，曰贊贊襄哉！」
- B1 禹にたいする帝の呼びかけ。禹の應答
帝曰：「來！禹，汝亦昌言。」禹拜曰：「都！帝。豫何言？豫思日孜孜。」皋陶曰：「吁！如何？」
- δ 禹の問いかけ，禹による演説，洪水に苦闘したことの詳述と，皋陶の同意。
禹曰：洪水滔天，浩浩懷山襄陵；下民昏墊。豫乘四載，隨山刊木。暨益奏庶鮮食。豫決九川，距四海；濬畎澮，距川。暨稷播奏庶艱食，鮮食，懋遷有無化居。烝民

- 乃粒，萬邦作乂。」皋陶曰：「兪！師汝昌言。」
- B2 在位にかんする禹と帝との對話，韻文の部分。
- 禹曰：「都！帝。慎乃在位。」帝曰：「兪！」禹曰：「安汝止，惟幾惟康；其弼直，惟動丕應。俟志以昭受上帝，天其申命用休。」帝曰：「吁！臣哉鄰哉！鄰哉臣哉！」禹曰：「兪！」
- ε 宇宙論を述べる「帝」による演説
- 帝曰：「臣作朕股肱耳目，豫欲左右有民，汝翼；豫欲宣力四方，汝爲；豫欲觀古人之象，日，月，星辰，山，龍，華蟲，作會，宗彝，藻，火，粉米，黼黻，絺繡，以五采彰施于五色，作服，汝明；豫欲聞六律，五聲，八音，在治忽，以出納五言，汝聽；豫違，汝弼；汝無面從，退有後言。欽四鄰，庶頑讒說，若不在時，侯以明之，撻以記之；書用識哉，欲竝生哉。工以納言，時而颺之；格則承之庸之，否則威之。」
- B3 禹による帝の義務に關する演説，大部分は四音律，一部，押韻
- 禹曰：「兪哉！帝。光天之下，至于海隅蒼生，萬邦黎獻共惟帝臣。惟帝時舉，敷納以言，明庶以功，車服以庸。誰敢不讓？敢不敬應？帝不時，敷同日奏罔功。無若丹朱傲，惟慢遊是好，傲虐是作，罔晝夜頌頌；罔水行舟。朋淫于家；用殄厥世。」
- ζ 禹の治績について詳しい演説，帝による同意
- 豫創若時，娶于塗山，辛壬癸甲；啟呱呱而泣，豫弗子，惟荒度土功。弼成五服，至于五千；州十有二師。外薄四海，咸建五長。各迪有功，苗頑弗即工，帝其念哉！」帝曰：「迪朕德，時乃功惟敘。」
- η 皋陶の業績にかんする言葉
- 皋陶方祗厥敘，方施象刑，惟明。
- θ 樂に關する夔の演説
- 夔曰：「戛擊鳴球，搏拊琴瑟，以詠，祖考來格。虞賓在位，群后德讓。下管鼗，鼓，合止祝敵，笙鏞以間；鳥獸蹢躅。簫韶九成，鳳皇來儀。夔曰：「於！豫擊石拊石，百獸率舞，庶尹允諧。」
- B4 帝の「作歌」にかんしての報告
- 帝庸作歌。曰：「敕天之命，惟時惟幾。」
- ι 帝と皋陶による歌。四字韻句，女性韻，帝による締め言葉
- 乃歌曰：「股肱喜哉！元首起哉！百工熙哉！」皋陶拜手稽首，颺言曰：「念哉！率作興事，慎乃憲，欽哉！屢省乃成，欽哉！」乃賡載歌曰：「元首明哉，股肱良哉，庶事康哉！」又歌曰：「元首叢脞哉，股肱惰哉，萬事墮哉！」帝拜曰：「兪，往，欽哉！」

より詳しい分析に入る前に、皋陶謨の A と B の構文にみられるはっきりとした對稱性を確認しておいてもよいだろう。A1 は、皋陶をして短い言葉で表現させ、禹には、「兪如何」と言わしめている。そして B1 は、それを鏡に映すかの如き對稱性を有す。禹が話し、皋陶が「吁！如何？」と答える。A2 では、皋陶は少し長めの言葉をのべ、禹は道理にかなった言葉にたいして拜禮し、「はい」と答える。同様に、δにおいては、禹は、その言葉を擴大させ、それに對して皋陶は「はい。貴方の立派なお言葉を模範といたします」と答えている²⁰⁾。その後は、對稱の形は明確ではなくなるとともに、皋陶の言辭が A の残りの部分を占めることになる。ちょうどそれは、禹と帝が B の部分で同じ役割をするのと相應する。概していえば、B の部分は A の構成を鏡のように映していると思われる。それは一見、A を参考にしているようであり、それ故、これまで一連のもので連續すると理解されてきたのである。

しかしながら、仔細に觀察してみれば、この二つの部分には、語彙に關して、明確な相違が數多く認められ、それらがもともと、一つのものには屬していなかった可能性を示唆しているように思えるのである。下記の文字は、かなり異なる頻度で登場する。

	A	B
以	0	11
用（前置詞）	0	4（含む：庸）
乎	3	0
汝	0	9
豫	1	12
我	4	0
乃	2	7
作	0	7
四	0	5
之（助字）	0	3

さらにいえば、間合いをたもつ目的での形容詞句は²¹⁾、A では、全く確認できなかったが、B では三度にわたって使われている。すなわち、「惟帝時舉，惟慢遊是好」，および「傲虐是作」の句である。二つの部分には顕著な相違があるという見方が正しいとすれば、古文『尚書』の編者がこれらの部分を二つのはっきりと異なる二章として区分し

たと改めて考えてみることも、あながち意味のないことではなかろう。確かに、二部の内容を仔細に観察すると、この印象をいっそう強くするのである。

A は、君主の徳をめぐって論が展開する。「允迪厥徳」(A1)、「慎厥身」(A2)、「惟帝其難之」(A3)、「九德咸事」(A4) と。しかしながら、B は君主の徳については正面から言及することは少なく、むしろ主役は臣下である。「臣」という語は、A においては全く登場しないが、B ではそれは突出してでてくる。ε では、帝がかく言っている。「臣作朕股肱耳目」と。ζ において、とりわけ見過ごしてはならないのは、「迪朕徳、時萬功惟敘」ということであり、徳を抱くのは、臣下に他ならない。

さらに、A では、原初的には、一族の長として「帝」を呼んでいる。彼は「九族」を統べ (A2)²²⁾、まさしく「人を知る」(A3) ものであり、そのことは、民と何からの知遇をもつことを暗に示している。さらに A4 では、「家」と「邦」における階級を敘述しているのである。しかしながら、B は、禹が「光天之下」を覆う國家を述べることから始まり (B3)、海の果てまで視野に入れている。それは、四海を境界とし、五服をととのえ (ς)²³⁾、さらには「萬邦」を包み込んでいる。A では、このようなことは、毫も言われてはいない。

「皋陶謨」は、徳による統治を強く主張していると言われている。しかし、そのことに關しても、主張は極めて不均等に表れているのである。「徳」の字は、B では二回しか見えない (ε と θ)。そしてそれはどちらかという、さほど重要なところではない。それに對して、A では、九徳の目録をも含めて7箇所に見える。さらにいえば、「皋陶謨」は、中國の傳統的な「民本思想の源」と主唱されてきたが²⁴⁾、「在安民」という忠告と、「天聰明、自我民聰明」というかの有名な句は、A だけにしか見えないし、B は、人民の重要性を多くは語ってはいない。

以上のことはBが同様の文脈によって作成されたのではなく、また同じ編者ではなく全く異なる著者もしくは編者の手になったことを暗示していると考えられる。そして彼らの意圖は、Aの内容を受け継ぎ、いっそう充實させるということではなく、むしろそれを改正する、もしくは反論を出すことにあったということは、ほぼ確かであろう。Bは、Aの議論を裏返すといった意味においては、Aの鏡として映されていると思える。Aは、帝政以前を示し、對してBは帝國としての漢の思想、皇帝を制御するということがその目的である確立された官僚制を反映しているのである。

一つの具体的なことがかかる假説の傍證となるかもしれない。両者は「堯典」と並列を保ち——つまり意識的に引用しているといえるが——、Bではいささか解せない文句がある。それは、B2に見えるように禹が自分の治水を自慢している部分である。

『尚書』における競合する聲

禹曰：洪水滔天，浩浩懷山襄陵；下民昏墊。

これは、「堯典」の次の文章と通底することは、疑いない。

帝曰：咨！四嶽，湯湯洪水方割，蕩蕩懷山襄陵，浩浩滔天。下民其咨，有能俾乂？

しかし、比べてみてわかるように、それはそのまま引用しているわけではない。むしろ、Bにおいて、逐語的にいえば、引用は、『史記』が解説している「堯典」であろう。

嗟，四嶽，湯湯洪水滔天，浩浩懷山襄陵，下民其憂，有能使治者？²⁵⁾

十二の文字は、明らかに對應しており、それらは「堯典」には見えない。『史記』が同じように「皋陶謨」を引用していることは、紛れもない事実であり、第三のテキストが存在しており、『史記』と「皋陶謨」が引用している「堯典」の知られていない表現がそこにあると考えてもよいかもしれない。しかしながら、この推測は、少なくとも、Bの「皋陶謨」が「堯典」と同じ文脈で創成されたのではなかったことを暗示し、もしAであったとすれば、両者が一緒ではなかったことを物語るものである。

つまり、「皋陶謨」は統治の異なった側面を規定する別々の部分から成り立っているようである。しかしながら、ことがらは必ずしも単純なものではない、なぜなら、かかる部分自體が均質的とはいえないからである。これはすでに指摘したのだが、たとえば、劉和恵は、ηの「皋陶方祗厥敘，方施象刑，惟明」が舜や皋陶の言葉でないことから、明らかに挿入された句であり、前後の句とは整合性をもっていないと指摘している²⁶⁾。

しかし、文脈のなかでじっくりしているとは思えない實に頭を悩ますいくつかの文節があるのだ。たとえばαであり、それは禹の言説の一部で、最初の部分で目立って長い彼の言葉である。全ての他の箇所では、彼はせいぜい一節ぐらいの短いコメントをなしているに過ぎない。しかし、この部分では、二つのテーゼから始まり、對句法を用いて、結びに三つの修辭的な問いを持ってくるといった複雑な構成の議論となっている。このことは、それだけで十分に注目に値するが、さらにいえば、この文節の用語は、正當漢文以前の文體ではなく、非の打ち所のない正當漢文そのものである。大變よく似た文節が、『論語』『老子』『左傳』『荀子』などの古典の中に確認され²⁷⁾、また「巧言令色」は、まぎれもなく『論語』と對應する。

はたして、かかる悩ましい句は、後に付加されたものなのか。よしそうであれば、皋陶の續く文節、「都，亦行有九德」は、禹がA3で述べるところ、つまりαの前の「惟帝

其難之」にもともと直接に對應していたということになろう。皋陶が言わんとすること、それは「確かに、難しい。しかし、帝は九徳によるべし」、そしてそれに續くのは、九徳の内容である。皋陶は九徳を最初に創成した人物であると言われてきたのであるが、實際に「堯典」、「洪範」『論語』、「老子」、『管子』、『逸周書』など、少なからざる他の文獻にも九徳の内容があがっている。

「皋陶謨」「寛而栗，柔而立，愿而恭，亂而敬，擾而毅，直而溫，簡而廉，剛而塞，彊而義；彰厥有常，吉哉」

「堯典」「夔。命汝典樂，教胄子。直而溫，寬而栗，剛而無虐，簡而無傲」

「洪範」「三德，一曰正直，二曰剛克，三曰柔克」

『論語』季氏「君子有九思：視思明，聽思聰，色思溫，貌思恭，言思忠，事思敬，疑思問，忿思難，見得思義」

『老子』58章「是以聖人，方而不割，廉而不剷；直而不肆，光而不耀」

『管子』水地「夫玉之所貴者，九徳出焉，夫玉溫潤以澤，仁也。鄰以理者，知也。堅而不蹙，義也。廉而不剷，行也。鮮而不垢，潔也。折而不撓，勇也。瑕適皆見，精也。茂華光澤，竝通而不相陵，容也。叩之，其音清搏徹遠，純而不殺，辭也」

『逸周書』常訓「九徳：忠，信，敬，剛，柔，和，固，貞，順」

皋陶に特に關係するだけでなく、このことは、全く異なる書においても見られる常套句であると考えられる。Hans Stumpfeldt は、中國古典文學作品の集成で、いくつかの同じような検証を得ており²⁸⁾、彼は、かかる羅列、韻を踏んだ句などは、自身が主唱している「テキストの背後にあるテキスト」²⁹⁾、つまりそのまま移録されたのではなく、引用されたもしくは異なった書籍において言い換えられテキストというものに由來すると述べている。そうであるならば、教育において、もしくは役人の選抜といったものに供された一覽であるという形跡が認められるのかも知れない。いずれにしても、その前後のものとははっきりと異なった、そのテキスト固有の部分であると考えられる。かかる推論は、三音節の韻律、繰り返しみられる「而」の使用、さらには皋陶謨の他の箇所では登場しない美辭などを以て一層確からしさを加えることができるであろう。全ては、これがテキストに新しく加えられたものであり、そこにこそ見過ごすことのできない重要性が存在していることを物語っているのである。

おそらく、A4 にみえる禹の素っ氣ない「何」といった問いかけに對する返答は、本來は、この追加の部分の後、つまり A4（續）と銘打った部分であり、それは韻を踏んだ四音節であり、より古典的な文法にしたがい、前述の「徳辭」をいささかも含んではいな

い。A5では、議論がもう一度もどる。ここで一見して、これまでは姿を現さなかった帝が呼ばれ、禁止が機能しはじめ、リズムが再び變化する。しかしながら、テキストの基層からその節が十分に脱却しているわけではない。というのは、最後の句「人其代之」は、A3の「帝其難之」と對になっていると思えるので。

構文と内容の面でそれよりもはっきりとした中斷は、 γ にも及ぶ。きちんとした構成のもと、天の力について部分的に韻を踏み、全て「天」ではじまる六つの句からなり——最初の四句と最後の二句は完全に對句である——二句毎に「哉」と書かれた感嘆詞で締めくくっているのである。この一節における第二の顯著な特徴は、五行思想を反映した五類であることは、明らかである。これはAの他の箇所では、天も五運もほとんど目につかないなかで、注目に値するといつてよかろう。この場合もやはり、構文と内容から判斷して、前後の文脈とは違った段落であると考えられるのである。

要約すれば、「皋陶謨」の初期段階で基層を爲していたと見られるものに直接に結びつくと考えられる三つの部分がある³⁰⁾。それらは、ある種の注釋としての役割を擔っていたと考えられるもので、述べてきたような概念、すなわち知人、安民、徳、最終的には天といった概念を詳しく説明するものであった。この結論はそれほど驚くべきものでもないといつてさしつかえなからう。全ての漢籍は、「それらがいかなる名稱を備えていたとしても、何世紀にもわたって「育まれた」層を重ねたものであるものか、編者が亡くなってから付加されたか、そのまま受け継がれてきたか、それとも再構成されたか、つなぎ合わされたのか、そういったことは決めがたい」というDavid Nivisonの推測と一致するのである³¹⁾。

しかしながら、かかる例に關してとりわけ注目すべきことは、追加された文章は、「皋陶謨」のなかで、最も注意をひいているまさにその條を形成しているということ、つまり「徳」「天」さらには五行について述べているところである。さらにいえば、「堯典」と對應するすべては、かかる文章のなかに登場しているのである³²⁾。

全く同様の見方がBにおいてもなりたち、それは一連の不可解な發言でもってやはり始まっているのである。無名の帝が質問し、禹がそれに應え、皋陶がそこに口を挟み(δ)、そして禹が、帝に應えるよりも前に、まず彼に返答を行っている。禹が喋っていること、そこで彼は洪水にいかにか立ち向かったのかを大げさに誇っているのだが、しかし帝の質問には應えてはいない。實際の返事、つまり「昌言」は、これの後に置かれ、そこで禹は「都、帝、慎乃在位」と言っているのである。かくして、 δ は、付加された部分と考えねばならない。付言すれば、これは、「堯典」、或いは『史記』、さらには『尚書』の他の篇との類似を含んでいる、まさにAにおいて書き加えられた部分として分析した一節と同じである。これらすべてが、この節がテキストにそれ自體が加えられたのではないか

といった印象をも與えるのである。

かく、テキストは禹と帝とのあいだの短いやりとりで構成される (B2) のだが、そこから帝は数によってなるカテゴリー、それは、とりわけ五行思想であるが、それに強く影響された感情的ともいえる演説に移る (ε)。同じようにこの節も敘述の中でぴったりとおさまってはいない。とりわけ、それは後に続く節 (B3) 「光天…帝臣」が B2 で帝が述べたもの、「吁臣哉鄰哉」と直接につながるからに他ならない。たぶん、この節は丹朱に關する以下の段落を含んでいるのであろう。というのは、「惟帝時舉」とそれと反對の「惟漫遊是好，傲虐是作」とが對象となる同じ文法構文を引きたてていると考えられるからである。

しかし、εにおいては、敘述の面で再度の中斷が生じている。禹はここでもう一度自身の功業を誇示し始めるのであるが、それは承前に議論した話題とは関係がない。先の δ と、これは大變よく似ていると考えられる。そして注目すべきは、皋陶の言葉 (η) でやはり結ばれていることである。これは書き加えられたものと見なされ (cf 注 26)), おそらくと一緒に行われたのであろう。もとの文には、どちらも存在しなかったのではないだろうか。

次の θ も同じい。それまでには述べられていない夔という名前の樂師が、承前の内容とは一見してならん関係がなく、樂にかんして述べ始める。これはいわば、全くの調子外れでしかなく、文の中でこれに歩調を合わせようとする記載を確認するのは難しい³³⁾。

むしろ、主たる文は B4 につながるものであろう。そこでは帝が樂曲をつくるか少なくとも樂を歌うことが記され、B3 にそれはつながる。「庸」と「作」は語彙がしかるべく配當され、「敕天之命」と「光天之下」が對應している。樂曲は四音節からなる連であり、その内の引用される 2 連は、詩經の樂曲と似ている、ただそこには韻は踏んでいない。

しかし、その後、文は、「乃歌曰」といって續き、つながっていくのは、いくつかの歌である。それらは、やはり四音節からなり、女性韻を含む實に普通の押韻構成をもっている。

第二連から最終連まで、すべて韻をふみ、一連の押韻の句は、歌から歌へと變化していく。(喜・起・熙)=之部、(明・良・康)=陽部、(脞・惰・墮)=歌部である。

これらの歌は、「古歌」³⁴⁾ と稱されてきたが、『詩經』の押韻句を踏まえていることからすれば、春秋時代よりさかのぼって古いということはある得ず、おそらくは、より新しいと考えられる。繰り返される「烝哉」が見える『詩經』「文王有聲」とは異なり、『詩經』におけるかかる女性韻との相關性はみえない³⁵⁾。しかし重要なのは、かく見事に作られている歌は、それに先行する文とは調和していないことである。續く歌は、「敕天

之命」,「惟時惟幾」であり,それに對して,最後の三連の歌は,統治者と大臣の關係についてである。

以上のことから,次のようにまとめることができるであろう。

第一には,皋陶謨は二つの異なる部分——「正當」今文のなかで,この部分が混じり合うことによってカモフラージュされた二分別——から成り立っているようである。

そして第二には,この部分自體は異なった史料からなる原素材を貼り付けたものであり,それらの多くは,文章のおそらく原初的な層に付加されたものと考えられる³⁶⁾。とりわけ,第一の見解は,重要な意味を持っている。つまり『尚書』において,同質な部分でもなく,異なった層が互いに補足したり,補強したりすることによる補填でもって作成された文章の合成でもなく,むしろ絶對的に合わない對立する説話から實際には成り立っているものがあるということだ。そこから,次の問いが出されるであろう。他の章も「皋陶謨」のようなものがあるのか,推測されるのと同じ状況が認められるのか,と。

答えは,イエスである。本稿次章で考えるであろう「堯典」は,「皋陶謨」において見られたものと極めて類似の競い合う歌唱を含んでいるのである。

Ⅱ 堯 典

「皋陶謨」が難しい文章だとすれば,「堯典」はそれよりもっと難解であることは間違いない。古く漢代において,「堯典」という二文字だけで十萬言の注釋があり,難解な最初の四文字「曰若稽古」では,2.3萬言の解説がだされ³⁷⁾,顧頡剛,劉起釔などによる權威ある『尚書』の注釋は,「堯典」だけで400ページにものぼる³⁸⁾。語彙分析と構文法にかんして,多くの問題點を含有していることに加えて,「堯典」にも「皋陶謨」とおなじく,よくわからない篇章にめぐってのいきさつがある。「偽」古文では,舜典が後にきているが,これは「正當」今文では,堯典篇と一緒にになっていた。向後,二つは系統的に一つの篇に屬すると推定されてきたのである。以下の分析はかかる推測にたいする疑義であり,そのためには,まず最初に「堯典」の構造を概觀しておくことにしたい。内容に忠實にしたがって,その段落を確認すれば,以下のようなことになるう。

A1 堯の贊美.

曰若稽古帝堯曰放勳欽明,文思安安,允恭克讓,光被四表,格于上下。

A2 四音節句での堯のさらなる贊美,前辭反復³⁹⁾。

克明俊德,以親九族;九族既睦,平章百姓;百姓昭明,協和萬邦。黎民於變時雍。

A3a 功績の説明:曆制作にむけて羲和に委任したことの記載

乃命羲和，欽若昊天；厯象日月星辰，敬授人時。

α 四方と四季にかんする暦を検證すべく，羲と和の関係者への四つの對稱的な命令⁴⁰⁾

分命羲仲，宅嵎夷，曰暘谷。寅賓出日，平秩東作。日中，星鳥，以殷仲春。厥民析；鳥獸孳尾。／申命羲叔，宅南，〔曰大〕交。平秩南訛。敬致。日永，星火，以正仲夏。厥民因；鳥獸希革。／分命和仲，宅西，曰昧谷。寅饒納日，平秩西成。宵中，星虛，以殷仲秋。厥民夷，鳥獸毛毳。／申命和叔，宅朔方，曰幽都。平在朔易。日短，星昴，以正仲冬。厥民隤；鳥獸氄毛。

A3b 帝の演説⁴¹⁾，暦と百工にかんして羲と和に對しての今ひとつの命令

帝曰：「咨！汝羲暨和。期三百有六旬有六日，以閏月定四時，成歲。允釐百工，庶績咸熙。」

A4a 有能な人材の拔擢をめぐる帝と放齊の對話。畀の拒否

帝曰：「疇咨若時，登庸？」放齊曰：「胤子朱啟明。」帝曰：「吁！畀訟，乎？」

A4b 有能な人材の拔擢をめぐる帝と驩兜の對話。共功の拒否

帝曰：「疇咨若豫采？」驩兜曰：「都！共工方鳩僝功。」帝曰：「吁！靜言庸違，象恭滔天。」

A5a 有能な人材の拔擢をめぐる帝と四嶽の對話。鯀の拔擢

帝曰：「咨！四嶽，湯湯洪水方割，蕩蕩懷山襄陵，浩浩滔天；民其咨。有能俾乂？」兪曰：「於！鯀哉！」帝曰：「吁！咈哉！方命圯族。」嶽曰：「异哉。試可，乃已。」帝曰：「往，欽哉！」

β 完結していない記録

九載，績用弗成。

A5b 帝と四嶽の王位繼承をめぐる帝との對話。舜の拔擢と帝の女子との婚姻

帝曰：「咨！四嶽。朕在位七十載；汝能庸命，巽朕位。」嶽曰：「否德忝帝位。」曰：「明明揚側陋。」師錫帝曰：「有鰥在下，曰虞舜。」帝曰：「兪！豫聞。如何？」嶽曰：「瞽子；父頑，母嚚，象傲。克諧以孝，烝烝乂，不格姦。」帝曰：「我其試哉！」女子時，觀厥刑于二女。釐降二女于嬀汭，嬪于虞。帝曰：「欽哉！」

[B1] 舜の贊美。この部分は今文には無い

曰若稽古帝舜，曰重華，協于帝。濬哲文明，溫恭允塞。玄德升聞，乃命以位。

B2 四音節句での舜のさらなる贊美。前辭反復。

慎徽五典，／五典克從。／納于百揆，／百揆時敘。／賓于四門，／四門穆穆。／納于大麓，烈風雷雨弗迷。

- B3 帝の演説。舜への禪讓。舜の辭退。
帝曰：「格汝舜！詢事，考言，乃言底可績，三載；汝陟帝位。」舜讓于德弗嗣。
- B4 功績の記録。舜の即位。
正月上日，受終于文祖。在璿璣玉衡，以齊七政。肆類于上帝，禋于六宗，望于山川，徧于群神。輯五瑞；既月乃日，覲四嶽群牧，班瑞于群后。
- γ 四月の功績記録。四方における供物の記録。
歲二月，東巡守，至于岱宗，柴；望秩于山川。肆覲東后。協時，月，正日；同律，度量，衡。修五禮，五玉，三帛，二生，一死贊，如五器，卒乃復。五月，南巡守，至于南嶽，如岱禮。八月，西巡守，至于西嶽，如初。十有一月，朔巡守，至于北嶽，如西禮。歸，格于藝祖，用特。
- B5 禹の治世における五月の功績記録。
五載一巡守，群后四朝；敷奏以言，明試以功，車服以庸。肇十有二州，封十有二山，濬川。象以典刑。流宥五刑。鞭作官刑，扑作教刑，金作贖刑。眚災肆，赦，怙終賊，刑。欽哉，欽哉，惟刑之恤哉！流共工于幽洲，放驩兜于崇山，竄三苗于三危，殛鯀于羽山；四罪而天下咸服。
- B6 紀年をもつ功績記録。堯の死と供物
二十有八載，帝乃殂落。百姓如喪考妣，三載，四海遏密八音。月正元日，舜格于文祖。詢于四嶽，闢四門，明四目，達四聰。
- B7 韻文體の演説。十二牧への訓示
咨十有二牧，曰：食哉惟時！柔遠能邇，惇德允元，而難任人，蠻夷率服。
- B8 有能な吏をめぐる舜と兪との對話。禹の任命。
舜曰：「咨！四嶽。有能奮庸熙帝之載，使宅百揆，亮采惠疇？」兪曰：「伯禹作司空。」帝曰：「兪！咨禹，汝平水土，惟時懋哉！」禹拜稽首，讓于稷，契暨皋陶。帝曰：「兪！汝往哉！」
- B9 帝による三つの命令。棄，契，皋陶の任命。
帝曰：「棄！黎民阻飢。汝后稷，播時百穀。」
帝曰：「契！百姓不親，五品不遜。汝作司徒，敬敷五教，在寬。」
帝曰：「皋陶！蠻夷猾夏，寇賊姦宄。汝作士，五刑有服，五服三就；五流有宅，五宅三居。惟明克允。」
- B10 有能な吏をめぐって帝と吏の間の三人の對話。垂，益，伯夷の任命。
帝曰：「疇若豫土」兪曰：「垂哉！」帝曰：「兪！咨垂，汝共工」，垂拜稽首，讓于咎，斨暨伯與。帝曰：「兪！往哉，汝諧。」
帝曰：「疇若豫上下草木鳥獸？」兪曰：「益哉！」帝曰：「兪！咨益，汝作朕虞。」

益拜稽首，讓于朱，虎，熊，羆。帝曰：「俞！往哉，汝諧。」

帝曰：「咨！四嶽。有能典朕三禮？」僉曰：「伯夷。」帝曰：「俞！咨伯。汝作秩宗。

夙夜惟寅，直哉惟清。」伯拜稽首，讓于夔，龍。帝曰：「俞。往，欽哉！」

B11a 帝の命令。夔の任命。

帝曰：「夔！命汝典樂，教胄子。」

δ 韻律の羅列。三字韻句と四字韻句

直而溫，寬而栗，剛而無虐，簡而無傲。詩言志，歌永言，聲依永，律和聲。八音克諧，無相奪倫，神人以和。

B11b 夔の返答。帝の命令。龍の任命。

夔曰：「於！豫擊石拊石，百獸率舞。」帝曰：「龍！朕聖讒說殄行，震驚朕師。命汝作納言，夙夜出納朕命，惟允。」

B12 (上述の?) 二十二人に向かっての帝の命令

帝曰：「咨！汝二十有二人，欽哉！惟時亮天功。」

B13 評價と獎勵にかんする功績の記述

三載考績；三考黜陟，幽明庶績咸熙。分北三苗。

B14 舜の御代の總論

舜生三十，徵庸三十，在位五十載，陟方乃死。

注目すべき第一のことは、A と B との際だった對稱性である。A1 と B1 はともに堯と舜への哀悼であり⁴²⁾、それらは、四字韻句 (A2, B2) の哀悼へと繋がる。ともにそれは、最後の句にあっては、六音節として最高潮に達する。變わって、質疑には義/和 (A3) と舜 (B3) を任用することに轉じ、文章は義/和 (α) と舜 (γ) による四方における行動を詳述することにうつり、四嶽のことが A5 で、ついで B4, B6, B8 において登場し、A4b で登場した共工と驩兜の名が B5 でもう一度見られ、さらに A5a と B5 では、鯀が主役となる。最後に、有能な人士を任用することに關する敘述で終わる。

これら全ては、この二つの部分が互いに緊密な一致を見えるということを示していると言えるかもしれない。しかし、より詳細に見てみると、こういった印象とは相反する見解がでてくる。最近の論考のなかで、Martin Kern は、「堯典」の二つの部分が、—— もしくは古文における「堯典」と「舜典」が——「古代の王制における異なった思想上の見解を示している」のは、それらが、「神話時代の二つの帝の描寫に明らかな相違」が見て取れるからであるとする。最初の部分では、「堯の統治を代わって行うのが帝自身の責務であるが、話が舜にうつると、それは統治階級へと變わっている」との Kern の視點は、興味深い。舜は、國の政治にかんして國家的視點をしめし、一方、堯はといえば、

カリスマ的の支配を表現しているのである。

補完的關係をもつ兩者の統治にかんしての堯と舜は、置かれている状況にしたがって交互に實現する國家の支配の補完的統治として示されている。事實、少なくとも秦と西漢初期では、官僚政治（舜的モデル）のみならず、特異と言ってもよいカリスマ支配（堯的モデル）が見られるのである。

「堯典」におけるそれぞれの描寫は、どちらかといえば、異なった修辭的方法をもちいており、今文『尚書』から窺えるよりも、より「融合度が少ない」ように思わせる。つまり、「二つの異なる文章」と考えねばならないということを、確實に物語っている、Kern は、こう述べているのである⁴⁴⁾。このことは、「皋陶謨」に關する我々の考察と同じ結論に達していると言ってもよからう。なるほど、語彙と文法を比較検討してみれば、先に示したものと共通性があると認められるものの、「堯典」の A と B の間には、見過ごすことができない違いが生じているのである。A と B において、それぞれの語が登場する頻度を下記に表にして示たものを参照していただきたい。

	【A】	【B】
惟	0	8
五	0	16
九	3	0
民	6	1
厥	5	0
汝	2	15
乃	2	6
作	1	9
反復語	6	1

これは、「皋陶謨」と著しく似ている状況である。二つの場合において、語彙と政治思想の面で、A と B 兩者は明確に違ったものと認めることができる。A は、統治者の徳を重視するカリスマ的統治の觀點を表し⁴⁵⁾、もう一方は、二つの B に見られる任用をめぐっての會話を見ればわかるように、帝とその國家に責任をもつ大臣が最も重要な役割であるといった官僚的統治の場合を想定していると思われる。

さらに、二つの章において、後半部は術數的概念に結びつく。とりわけ、五という

數で括られる世界を包含する五行思想がそうである⁴⁶⁾。Michel Nylan は、「書經は繼續的に發展してきた徳治政治にむけての足跡を満載している」と言う⁴⁷⁾。それは、彼女が別の章からそのような考えにいたったのであるが、我々は、さらに一步前進させて、かかる「繼續的に發展してきた足跡」は『尚書』のそれぞれの章にもそれを留めているとあってよいであろう。それが事実であれば、その異なった「足跡」は、章から章へといった平面的に加えられただけではなく、層から層へという垂直的に加えられたということになろう。古文『尚書』における「堯典」から「舜典」の区分、「皋陶謨」から「益稷」への区分は、かかる異なった部分を平面的次元で移動させた仕儀だったのかもしれない。しかしながら一方で、編輯の上でのこのような決定の背景には、『尚書』の傳本がなされていったと思しき重層の過程が隠れているとも考えられる。『尚書』の理解にたどり着くために、分析が必要なのは、紛れもなくかかる過程と言わねばならない。

Ⅲ 層 の 探 求

上記の所見は『尚書』の思想について考える上で、きわめて重要なことからである。書物全體に一つの觀點をもつことは無理であり、また個別の章の思想にかんして論ずることもできない。むしろ、我々は單一の章のなかでの異なった觀點を考慮に入れねばならないのである。しかしながら、かかる異なった觀點は、たがいに連關性を持たせることは可能なのか。『尚書』を編纂する過程において、ある編纂者たちが同じような方法で、意味の區切りというよりもむしろ意味の層を形成して、異なった章を加えていったのであろうか。本稿の最後に、「堯典」と「皋陶謨」にかんして、この疑問についての試論を述べてみたい。

もし、『尚書』の異なる部分にある層を加えたひとり、もしくは一つのグループの編者がいたとすれば、問題の二つの章にあてはまる一つの章の中に認められる基準を想定できるかもしれない。それは、ちょうどモーゼ五書でヤハベやエロヒムの層が五書を通して全く異なった部分にあって同じようなはっきりとした兆候でもって檢證されるのと同じい。

いま、一つの章と關連すると見られたすべての基準を A と B の二つに適應し、上表を重ね合わせれば、それが言えるかどうか分かるであろう。それは次のような圖表である。

	皋 A	堯 A	皋 B	堯 B
汝	—	2	9	15

『尚書』における競合する聲

豫	1	2	12	15
我	4	1	—	—
惟	2	—	11	8
乎	3	1	—	—
重言	4	6	2	1
倒置目的語	—	—	3	1
厥	3	5	2	—
之（助字）	—	—	3	—
作	—	1	7	9
四 ⁴⁸⁾	—	2	5	8
九	3	3	2	—
乃	2	2	7	6
民	5	6	3	1
以	—	7	11	7
用（前置詞）	—	1	4	1
五	8	—	7	16

完全ということであれば、それは、一貫して自身の語彙を使う同じ編者にかかり、左の二列は右の二列同様、同じ用法を示さねばならない。表を見て分かるように、完全といえるものはほとんどないのだが、かなり共通したパターンを示すものが少なからずある。例をあげよう。人稱名詞（汝、豫、我）の使い方、機能語である「惟」と「乎」の使用、動詞の「作」（これはむしろ珍しいケースである）と数字の「四」を好んで使うこと、繰り返しの言葉と目的語の倒置、古語的な代名詞である「厥」と不變化詞の「之」もそうであろう。そのほかのケースは、どちらかと言えば曖昧である。例えば、前置詞である「以」と「用」は「皋陶謨」Bでしか使われていないが、「堯典」ではまんべんなく置かれている。あるケースは、明らかにそれとは相反し、数字の「五」、それは「堯典」でしか確認できないが、「皋陶謨」Aでは、頻度が高く用いられている。しかしながら、かかる現象は、限定されたものと言ってよいかも知れない。「堯典」Aの「以」7例の場合、4例は後になって挿入されたとおぼしき句の中に見える。より注目しなければいけないのは、「皋陶謨」Aの「五」8例のうち、その7例は上述の挿入部分と考えられるなかで一番最後の句にみられ、その八番目の例は、その直前に見られるのである。

改めて、表を考えて見てみると、AとBの語彙には明らかに同じようなパターンがあるといえよう。上述のごとく、これらの部分は大變類似した様相を示していることから、

二つの相違、つまり、これらの章のなかで競合するテキストの層が存在しているとみるのが正しいという結論にいたるのである。二つの章は最初は A の部分だけで形成されていた、それは統治者がそなえ、人民に施す「徳」をともなった「カリスマ的支配」の見解を表し、後になって B の部分が別の編者によって加えられ、それは、官僚的統治の内容を形成したのである⁴⁹⁾。

おそらくは、かかる層はそれぞれ異なった時代のものであろう。つまり帝國以前、帝國時代、または特定の地域とも関係するかもしれない。事実、少なくとも「堯典」においては、後者である可能性を指す表象がある。A3 でみられる義と和は、『楚辭』においてもまた言及されている⁵⁰⁾。さらに、A4 のある表現は、楚の方言に属するものと認められ⁵¹⁾、A5 の鯀にかんする敘述は、『楚辭』におけるそれと通底するといえるかもしれない⁵²⁾。

一方、顧頡剛におくれる陳夢家は、「堯典」における數カ所で秦の制度の影響を認めることができるという。「十二の地域」「十二の山」(B5)、「十二の牧」(B7) は、統一秦以前の九から出て、しかしそれは秦制から變化したものに相違ない⁵³⁾。さらに、陳夢家によれば、「協時、月、正日」と「同律、度、量、衡」(俱にゞ見える) は、明らかに秦の影響であるとされ⁵⁴⁾、決定的なものとしては、B5 にみえる禹に因む「五載一巡守」の舉行は、秦始皇帝に起因するものである⁵⁵⁾。かかる見解をめぐる注目すべき点として、楚の影響の痕跡すべては「堯典」の A の部分に表れ、秦の影響の痕跡すべては B の部分に見えることである⁵⁶⁾。「皋陶謨」はとて「十二師」に言及し、それが B の部分に置かれている。對して、A では、九の數が優勢である、A2 の「九族」、A4 の「九德」といったように。

おそらく、以上のことから、A の層は楚に B の層は秦に起因するとみてよからう、しかし、批判に耐えられる強固な結論にたどり着くには、より一層深い考察が求められる。考察はここで取り扱った二つの章だけでなく『尚書』全體を対象とせねばなるまい⁵⁷⁾。それを進める中で、内容の異質さが言語の相違と對應する他の章が少なくないことが分かるであろう⁵⁸⁾。それは「皋陶謨」と「堯典」において競合する層と類似した、しかもより注目すべき相違が見て取れるような章である。

かかる分析は究極的には尚書研究を取り巻く根深い問題、原文の構成の多様性ということに光を當てるかもしれない。本稿は「皋陶謨」と「堯典」におけるより廣範圍の層に焦點をあててきたのだが、より一層それらの構成は複雑であるということを念頭に置かねばならない。かりに、上述の如き數多くの「改竄」が確認されるとすれば、それらは推定に根據をあたえる——そしておそらくは微少な——核心を加えられる小さな個別の單位のつぎはぎであるように思われるのである。

このような分析は——それは他の『尚書』の章に對しても可能であるが——傳達に

おけるテキストの入り組んだ行，漢代だけをとっていても當惑する版本の量⁵⁹⁾，そして後漢と唐のテキストがそれまでの異本をあわせて一つのテキストにしたという事實を照射するものであろう。

テキストの歴史の複雑さを考慮にいれば，かかる形式は，一向に驚くには値しない。曲がりなりにも統一されているということのほうが，むしろ驚きである。今日の尚書研究者にとって，前後の文脈，加之，文章の中に挿入された多くの書き入れ，注釋なども考慮に入れて，各章ではなく各段落自體を考察の對象とせねばならないのである。『尚書』における多様なそしてたぶん競い合っている聲は今日においても研究者の頭を悩ましてやまない。

参 考 文 献

- Assmann, Jan. 1999. *Das kulturelle Gedächtnis. Schrift, Erinnerung und politische Identität in frühen Hochkulturen*. München: C. H. Beck.
- Behr, Wolfgang. 1996. *Reimende Bronzeinschriften und die Entstehung der chinesischen Endreimdichtung*. PhD diss. Goethe-Universität, Frankfurt/M.
- 陳雄根，何志華．2003．先秦兩漢典籍引《尚書》史料彙編．（香港中文大學出版社）
- 陳夢家．2002．『尚書通論』河北教育出版社．
- 顧頡剛，劉起釔．2005．『尚書校釋譯論』北京，中華書局
- Henderson, John B. 1991. *Scripture, Canon and Commentary: A Comparison of Confucian and Western Exegesis*. Princeton: Princeton University Press.
- 蔣善國．1988．『尚書綜述』上海，上海古籍出版社
- 焦俊霞．2009．「民本思想之源——《皋陶謨》」《蘇州大學學報（哲學社會科學版）》5: 55-57.
- Karlgren, Bernhard. 1946. "Legends and cults in ancient China." *BMFEA* 18: 199-365.
- . 1948. "Glosses on the Book of Documents I." *BMFEA* 20: 39-315.
- . 1950. "The Book of Documents." *BMFEA* 22: 1-82.
- Kern, Martin. forthcoming. "Language and the Ideology of Kingship in the 'Canon of Yao'," in *Ideology of Power and Power of Ideology in Early China*, edited by Yuri Pines, Paul Rakita Goldin, and Martin Kern. Leiden: Brill.
- Legge, James. 1991. *The Shoo King or The Book of Historical Documents*. Taipei: SMC Publishing.
- 劉和惠．1998．《重讀〈尚書皋陶謨〉——兼論皋陶謨的歷史地位》（『安徽史學』2: 3-6.
- 劉起釔．1997．『尚書源流及傳本考』遼寧大學出版社
- Lovejoy, Arthur O. 1957. *The Great Chain of Being: A Study of the History of an Idea*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 王充『論衡校釋』1996．黃暉篇（北京 中華書局）
- 馬雍．1982．『尚書史話』（北京 中華書局）
- Nivison, David. 1999. "The Classical Philosophical Writings." Pp. 745-812 in *The Cambridge History of Ancient China: From the Origins of Civilization to 221 B.C.*, edited by Michael Loewe and

- Edward L. Shaughnessy. Cambridge : Cambridge University Press.
- 野村茂夫. 1974. 『書經』(東京 明德出版社)
- Nylan, Michael. 2001. The Five "Confucian" Classics : Yale University Press.
- , 何如月. 2014. "On the so-called 'Preface' (xu 序) for the Documents." Paper delivered at the Oxford Shangshu conference.
- Pulleyblank, Edwin G. 1996. Outline of Classical Chinese Grammar. Seattle : University of Washington Press.
- 錢宗武. 2004. 『今文尚書語法研究』(北京 商務印書館)
- 『尚書正義』2001. 李學勤篇. (臺北 臺灣古籍出版有限公司)
- 『史記』. 1997. (北京 中華書局)
- Steck, Odil Hannes. 1998. Old Testament Exegesis : A Guide to the Methodology. Translated by James D. Nogalski. Atlanta : Scholars Press.
- Stumpfeldt, Hans. 2002. "Ein Diener vieler Herren : Einige Bemerkungen zum Yen-tzu ch'un-ch'iu." Pp. 183-208 in Und folge nun dem, was mein Herz begehrt — Festschrift für Ulrich Unger zum 70. Geburtstag, edited by Reinhard Emmerich and Hans Stumpfeldt. Hamburg : Hamburger Sinologische Gesellschaft.
- . 2007. "Ein Lied der, Lieder' ? — Vorläufige Bemerkungen zu einem Passus in Erh-ya 3." Oriens Extremus 46 : 28-47.
- . 2010. "Thinking Beyond the 'Sayings' : Comments About Sources Concerning the Life and Teachings of Confucius (551-479)." Oriens Extremus 49 : 3-27.
- 王燦. 2013. 『《尚書》歷史思想研究』(北京 中華社會科學出版社)
- 王國維. 1984. 『觀堂集林 : 附別集』(北京 中華書局)
- 『新輯本桓譚新論』. 2009. 朱謙之篇. (北京 中華書局)
- 閻若璩. 2010. 『尚書古文疏證』(上海古籍出版社)
- 于文哲. 2011. 「《尚書皋陶謨》古歌解讀」. (『名作欣賞』20 : 4-5.)
- 臧克和. 1999. 『尚書文字校詁』(上海教育出版社)
- 張文國. 2000. 『尚書語法研究』(成都 巴蜀書社)
- 『朱子語類』1999. 黎靖德篇 (北京 中華書局)

注

- 1) 本稿は2012年に京都大學人文科學研究所において客員教授として行った研究を基にしている。變わらぬ支援をいただいた研究所の同僚、とりわけ言い盡くせない親切と、はかりしれない研究面での助言を賜った富谷至教授に感謝する。
- 2) Lovejoy 1957, 11 :
「知られざる者は全て偉大なり」は、我々の時代において大變な評價を享受している者もふくめて、あまたの哲學者の評判のかなりの部分を説明している。讀者は、彼らの言うことを正確には知らない。しかし、氣高き雰囲気ので、いっそうそうなのである。彼が深遠な思想を熟考するときに、誰もがいだく畏怖と賞賛が彼に寄せられる。深遠さが、かれだけが底知れなさを見通してるということでもって、彼をかくたらしめるのである。
- 3) 『史記』卷101「孝文帝時、天下無治尚書者、獨聞濟南伏生故秦博士、治尚書、年九十餘、老不

可徴，乃詔太常使人往受之」。

問題は，しばしば主張されるように（例えば，劉 1997, p. 28），テキストが失われたということではさそうであることに留意せなければならない。むしろ，誰も「それを整理する」，つまり正しく配置し，それに合理性を與えることができなかった，要するに理解できなかったのである。

- 4) 『論衡』卷 20「孝成皇帝讀百篇尚書，博士郎吏莫能曉知，徵天下能爲尚書者」
- 5) 劉 1997, 30.
- 6) 『朱子語類』78「伏生書多難澀難曉，孔安國壁中書却平易易曉」。興味深いことに，朱熹は今文の篇章の曖昧さを，その信憑性の證據とみなす。——「知られざる者は全て偉大なり」
- 7) Karlgren 1948, 43. 野村茂夫 1974, 246, も参照，
彼もまた『尚書』の翻譯が困難であることを認めている。特に解説を書く階段になってから，それを痛感した。
- 8) 『觀堂集林』2, 75「與友人論詩書中成語書」。
- 9) 前掲。
- 10) Stumpfeldt 2002, 183.
- 11) Legge 1991, 382 その見解を蘇軾に由來するものとした。
- 12) Karlgren 1948, 49 (No. 1214).
- 13) かかる議論については，蔣 1988, 21-28. 参照
- 14) 古文尚書も含めて，尚書は基本的には首尾一貫した完全な書であるとする研究者がなおも存在する事は，注目せねばならない。王燦 2013 1-11
同様の思い込みは，錢宗武 2004, 張文國 2000. のような『尚書』の語法における研究にも，潜在的に見られる
- 15) 研究の集成は，顧・劉 2005 の 4 卷から知られる。
- 16) テキストの完全性と分析の方法に関する疑問は，當該分野の簡潔な序文においても，ひろく聖書の研究においても議論されている。Steck 1998, esp. 47-61.
- 17) 確かにこれまでの傳統的な注釋では，完全な書としての『尚書』の首尾一貫性を主張し「五經すべてに見られる單一の首尾一貫性」(Nylan 2001, 8) とさえ云う。
かかる見解は，經書にかんして特異なものではなく，事實，經書そのものの概念は「學術的一貫性をともなった新しい形式をもつ原理」(Assmann 1999, 127)，であり，經書の性質に關する最も普遍的推測は，「それらが上手に順序だれられており，一貫性を有し，論理的に，宇宙論的に，または教育的な原理にしたがって編纂されている」(Henderson 1991, 106) といったものである。
- 18) 古文で，「堯典」と「舜典」に續く「大禹謨」は，後世の制作であることは確かである。従って，ここでは取り上げて考察しない。
- 19) 蔣 1988, 32-33, で引用している呂祖謙，顧炎武，閻若璩，惠棟などは，この事柄に首肯する。興味深いことに，蔣善國は B1（下記）の「亦」の一字を取り上げ，この箇所が本來は A とつながっていたことの證明たりうると指摘している。
- 20) 本稿での『尚書』の翻譯は，Karlgren 1950 に従う。
- 21) この構成にかんする考察としては張 2000, 159-71, および錢宗武 2004, 424-41. (Pulleyblank 1996, 70, は，「前置の目的」という)
- 22) 統治者はここでははっきりとは，言及されてはいない，この解釋は少なくとも孔穎達以降の支配的となる解釋を示す。『尚書』正義卷 4.
- 23) 五服-A (γ) でのこの語彙は，「五種類の衣服」を意味し，今ひとつの概念上の齟齬を表して

いることに注目されたし。

- 24) 焦俊霞 2009.
- 25) 『史記』卷 1, 20.
- 26) 劉和惠 1998, 4.
- 27) 陳雄根, 何志華 2003, 59-60. ここでいう並列・類似に加えて、『論語』顔淵「君子何患乎無兄弟也」, 『論語』八佾「何患於喪乎」を構文上の類似としてあげよう。
- 28) たとえば, Stumpfeldt 2007, Stumpfeldt 2010.
- 29) かかる研究法に對する評價にかんしては, Stumpfeldt 2002, *Oriens Extremus* 50 (2011).
- 30) 今ひとつの特徴も注目に値する。つまり, 接續詞「則」は, この部分では, 數回登場する(α で二回, ε でも二回)——ただし, ここだけである。 ε の「否則」は, とりわけ注目に値する。それは, 今文『尚書』無逸篇にしか見えない。
- 31) Nivison 1999, 745.
- 32) なお, 閻若璩 2010 に言及しているように, 他の書物からの引用は『偽古文尚書』の各編の骨格となっていることも注目に値する。この場合も同様に, 二篇の間の密接な關係を示すよりも, 引用というものが後に付加されたということを自ずと物語っているといえよう。
- 33) たとえば, 顧, 劉 2005, vol. 1, 477-95. Significantly, 『史記』はどちらかといえば, 皋陶謨のほぼ全文を譯して引用しているのだが, 一つの文のなかで變の間奏を要約しているだけであることは, 何らかの意味があるとせねばならない。
- 34) 于文哲 2011.
- 35) それらが, 文體の上では, 『史記』および後の正史に見える陳情書の表現にきわめて近いという Behr 1996, 34-35 の意見に, 私も同意する。
- 36) 興味あることに, もし B から切り離してなにか付け足した場合, 皋陶はこの章には全然現れない。帝——おそらくは舜——と禹との會話へと溶け込んでしまうのだ。それは, 換言すれば, 皋陶謨の二つの部分は, 一つに屬するのではないと言う印象に棹さすであろう。
- 37) 『新論』卷 9, 38:「秦近君能說堯典, 篇目兩字之說, 至十餘萬言, 但說曰若稽古, 二三萬言」。尚書小夏侯學によれば, 秦近君は秦恭と關連する。馬 1982, 18. 參照
- 38) 顧, 劉 2005, pp. 1-391.
顧頡剛は, 「堯典」と「皋陶謨」は戰國期から秦漢時代にかけてのものされた偽作であり, それらは, 當時の思想と關係していると強く主張している。(『古史辯』卷 1, 201f)
- 39) 『史記』卷 1, 15 は, 八句の韻文を加えた長い引用が見える。
- 40) Karlgren 1948, No. 1214, は次の様にいう。
「堯典」は二つの異なった部分から成立している。初めの部分, 冒頭の十八語からなり, 曆法の制定に及ぶ, この部分は, 西漢時代の編纂者によつてものされ, その影響をうけている。そこでは司祭によつて示された四時に従うことを求めている。そして, 彼は, 羲と和という二人の人物として扱っている。羲と和, そして彼らのもとに招かれた年下の兄弟, 羲仲を東に, 羲叔を南に, 和仲を西に, そして和叔を北に派遣したのである。そこから次に第二の部分, つまり始めの曆のそれぞれの季節の頭に四つの文節が挿入された。蔣 1988, 147, では, 条文にみえる日付は, 戰國期からはじまると指摘している。
- 41) おそらくは, 堯。しかし, 彼の名前は A1 を除いて, どこにも見えない。
- 42) B1 は, 古文のテキストから摘出されている, それは序文が, 切り離して扱うことができないにも関わらず, 調和がとれていないという特徴を持っているからであることは, 留意せねばならない。しかしながら, 二つの部分の對稱性を表示するために, 括弧つきでここに引用する。

- 43) Karlgren 1946 は、これらはふたりではなく、ひとりの人物だともっともらしく説明している。同じく。Karlgren 1948 No. 1214.
- 44) Kern 未発表稿
- 45) ことがらは、「民」ということに關していえば、はっきりしない。「堯典」の A では B よりも民について言及しているが、「皋陶謨」A とおなじく優位性をもつテーマでもなければ、挙げられてはいる民を氣にかけるというわけでもない。
- 46) これらの部分の起源にかんして推測することは魅力的といつてよい。統一秦以前か、秦漢時代か、もしくはそれらは地域的に異なった傳統に由來するのか。たとえば、臧克和 1999, 39 は、A4 で見られるいくつかの表現が『楚辭』に屬するものと見なす。結論を引きだすには十分ではないが、今後の研究の参考となるかもしれない。
- 47) Nylan 2001, 137. Nylan は以下のように言っている
1. 天の支配のモデル 2. 官僚制のモデル 3. 孝, 悌, 友のモデル 4. それによって人民を統治する文章家のモデル 5. 官吏に求められる自律と美德のモデル (同上.).
- 48) 四嶽を除く。
- 49) もしくは、逆に B は全ての章のなかでより古い層であり、A が後になって加えられたということも大いに考えられる。
- 50) この事は、蔣 1988, 147. で指摘されている。
- 51) 臧克和 1999, 39.
- 52) 顧頡剛『古史辨』1, 203.
- 53) 陳夢家 2002, 153-158, 388-89. 顧は、このことを 1923 に提議したのだが、1930 になって、彼の新見解をだし、西漢時代を採用した。陳夢家は顧の始めの說に同意する。
- 54) 陳夢家 2002, 159-60.
- 55) 陳夢家 2002, 160-61.
- 56) A2 は、記されている族の數は九であり十二ではないということ言いそえることができるかもしれない。陳夢家の說が正しければ、この部分には秦代の追加の跡がなく、十二は B において始めて見られるということになるう。
- 57) あきらかな始まりは、「盤庚」であろう。それは古文『尚書』での三部構成をもっており、この部分において文書化された演説はかなり異質なものだからである。しかし、それらは、「堯典」や「皋陶謨」にみられる統治理論とは異なるものを表しているとも思えない。「顧命」と「康王之誥」は一層異なる。これら二つの古文尚書は今文を吸収して、分離が正當性を缺くと見なされるので、確かに統一のとれたものに映る。
- 58) 「禹貢」は、格好の例である。その始めの部分には、「惟」が頻出 (34 回) し、それは他では全く見られないことである。そして第三の部分では、里の數と里程が特徴となっており、それらは他とは異質である。しかし、かかる相違は、上述とは區別されるものである。別のケース、「呂刑」は、「皋陶謨」「堯典」とより類似性を有する。もっとも、重要な箇所では違いが認められるのではあるが。
- 59) 陳夢家 2002, 38-53, は、七種の版を考え、それがどのように結びつけられたのかを示している。Michael Nylan, 何如月 2014, 5-6, では、先秦から四世紀におよぶ、一四種の版を挙げている。
- 60) 『論語』顏淵「舜有天下，選於眾，舉皋陶，不仁者遠矣。湯有天下，選於眾，舉伊尹，不仁者遠矣。」